

これから世界はどうなるのか — 米国編 — トランプのアメリカと世界

2017年1月の就任以来、その言動が何かと話題を集める米国のトランプ大統領。2020年の大統領選挙で再選はあるのだろうか。久保文明氏が大統領選挙に向けての展望を語るとともに、トランプ大統領の支持基盤やこれまでの政策を分析し米国の動きについて語った。

講師：久保 文明 氏

東京大学大学院法学政治学研究科 教授



岩盤のような支持層の背景に 白人ブルーカラー層の不満

日本では否定的な報道も多いが、トランプ大統領の最近の支持率は42%前後で、支持率が大きく変化することではなく、岩盤支持層が存在することがうかがえる。また米国の失業率は3.6%と1969年以来の非常に良い数字で、好景気が続いている。

トランプ氏の人気を支えてきた要因は、自由貿易、不法移民、そしてエリート層への不満などである。従来、共和党主流派は自由貿易を支持していたのに対して、トランプ大統領は反自由貿易の立場に立つ。また、少数派に配慮したポリティカルコレクトネス*に対して否定的な態度も目立つが、意外にもこれも支持者たちに受け入れられた。

実は米国の平均寿命は3年連続で短くなっている。それには40～50代半ばの高卒白人の死亡率の高さが影響している。これらの年齢層でオピオイド鎮痛剤など薬物中毒の蔓延との相関関係を指摘するデータもある。また働き盛りの24～54歳の労働参加率の低下、グローバル経済の勝者と敗者の明確化なども、白人ブルーカラー層の不満を鬱積させる結果となり、変化を求める大きなうねりとなった。

分断された米国の世論 不透明な次期大統領選の行方

2016年の大統領選挙は異例づくめだった。共和党が政治経験のない、孤立主義的傾向を持つ候補者＝トランプ

を指名した。今後もトランプのような候補者が登場する可能性は否定できない。

米国の世論は分断している。一つの政治的テーマについて、共和党内と民主党内ではまったく意見が異なる。人種間だけでなく白人の間でも分断がある。特に高学歴の女性と低学歴の男性との間での分断が進んでいる。

2020年の次期大統領選挙の行方は不透明だ。一般論として現職有利と言われるが、支持率的にはトランプ陣営は厳しいという見方もある。鍵になるのは共和党内で強力な挑戦者が現れるかどうか、そして現在20人以上が出馬表明している民主党の候補者指名争いがどうなるにかかっている。

米国第一主義は、孤立主義と 経済ナショナリズム

アメリカ・ファーストという言葉は、第2次大戦の際に参戦に反対した団体の名前でもあり、そこから徹底した孤立主義を意味する。TPP反対や北米自由貿易協定 (NAFTA) といった経済ナショナリズムと共にトランプ外交の特徴になっている。

しかし、日米関係では尖閣列島の領有を巡る問題など安全保障面で、日本にとって好ましい変化がみられた。一方、通商問題に関しては今後、厳しい局面を迎える危惧もある。

米中関係については、トランプ大統領個人の関心は通商問題にあるが、米政府は全面対決型アプローチを取り、厳しい態度で中国に臨んでいる。米国は過去にもこうしたアプローチをした例があり、中国は現在の米国の態度を過小評価すべきではない。ベトナムでの米朝首脳会談の結果に対しては、さまざまな評価があるが、今後の注目は北朝鮮が今以上の譲歩案を提示できるかどうかだろう。

米国はトランプ政権で寛大さなどを失った部分もあるかもしれない。しかし、合法移民を年100万人受け入れ、エネルギーでは、ますます大国になっている。このような米国を、トランプ政権だけを見て評価するのは適当ではない。

*差別・偏見を防ぐ目的の表現や概念